

国立国会図書館 図書館向けデジタル化資料送信サービスの導入

稲葉 直也（利用者支援課）

1. 図書館向けデジタル化資料送信サービスとは

早稲田大学中央図書館では、2015年5月18日より国立国会図書館（NDL）図書館向けデジタル化資料送信サービス（以下本サービス）の提供を開始した。これにより、NDLが電子化した資料のうち絶版等の理由で入手が困難な資料約137万点が、館内の専用端末から閲覧可能となった¹⁾。複写物が必要な場合はILL複写依頼の形で申込みを受け、著作権法の範囲内で提供を行っている。



【NDL デジタル化資料の閲覧画面】

2008年以降、NDLでは、明治期以降1968年までに受入れた図書、2000年までに発行された雑誌を中心に、約248万点を電子化し、そのうち著作権処理が完了したものはインターネットで一般公開している²⁾。2013年の著作権法改正により、一般公開ができない資料のうち、広く利用に供すべき価値を持ちながら絶版等の理由で入手が難しいものを、登録された図書館に限定して送信・複写物を提供する本サービスが実現することとなった。

2. 本サービスの活用状況

(1) 利用者の活用状況

本サービスの提供を開始し約4ヶ月（本稿執筆時点）だが、閲覧で約50名、複写で約70件の依頼があり利用は浸透しつつある。特に利用が多いのは戦前期資料で、満州や日本統治時代の朝鮮半島の出版物等、所蔵館が限られた貴重な資料を中心に、研究に大いに活用されている印象である。

(2) 図書館職員の活用状況

通常の学外ILL複写の申込みを受けたもののう

ち、学外に依頼することなく本サービスでの提供が可能なが分かったものは対応を切り替えるなど、利用者のみならず図書館職員にとっても本サービスは効果的に活用されている。

また、NDLデジタルコレクション自体が有用な文献探索ツールである。各資料には詳細な目次情報が作成されており、図書を目次から検索し確認できる点が特徴である。雑誌についても収録記事の確認がしやすく、記事索引的に利用することもできる。戦前期の図書・雑誌ばかりでなく、戦後期も2000年頃までの雑誌を中心に多くの資料がデジタル化されているため、文献探索にあたってまずNDLデジタル化資料の存在を期待し探すというように、不可欠なツールとなりつつある。

3. 閲覧・複写に係る制限に関して

本サービスに関しては、閲覧が専用端末に限られ、利用者が自由に複写出来ないことについて、研究目的での利用には大きな障害となっており、制限を外してほしいとの要望を受ける。この指摘はもっともであり、提供側としても心苦しい点である。しかし大学図書館は広く著作物を教育・研究のための利用に供することが使命である一方で、知的財産を適切に保護し濫用を防ぐ責務も同時に負っている。本来は著作権の問題から一般公開の出来ない資料でありながら、特別に送信が受けられている点を配慮いただき、制限については何卒ご理解を賜りたい³⁾。その上で本サービスが提供する豊かかつ貴重な資料を研究のために活用いただければ、図書館としてはこの上ない幸いである。

注・参考文献

- 1) 本サービスの詳細な利用方法は下記サイトを参照。<http://www.wul.waseda.ac.jp/Services/ndl.html>（最終確認 2015-09-18）
- 2) NDL資料のデジタル化の詳細は下記サイトを参照。<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/digitization/index.html>（最終確認 2015-09-18）
- 3) 公開のための著作権処理の難しさは次の論文が詳しい。石塚陽子、資料デジタル化に伴う著作権処理 インターネット公開のための作業を例として、びぶろす、2015、No. 69。